

「食の格差」体感 貧困への気づき

清泉小(鎌倉)の「ハンガーバンケット」

テーブルいっぱいのごちそうか、パンと水だけの昼食か
 抽選で決め、互いにどんな気持ちがあるか考える。そ
 んな「ハンガーバンケット」というプログラムが、清泉小
 学校(鎌倉市)で長年行われている。世界の経済的格差を
 体感し、貧困問題に気づくことが目的だ。

抽選次第でパンと水 美食組も複雑な思い



11月中旬の4時間目。5年
 生約90人が体育館に集まっ
 た。
 入り口で順にクジを引く。
 「高所得者」になればテーブ
 ルクロスのかかった食卓に座
 り、ハンバーガーやチキン、
 ジュースにお菓子と食べ放題
 だが、「中所得者」だと、ロ
 ールパンにチーズ、スープだ
 った。

け。「低所得者」になると床
 に座り、食パン4分の1と1
 杯の水しかもらえない。
 自然と、あつという間に食
 べ終えた「低」の児童が、お
 いしそうに食べ続ける「高」
 の児童をじつと見つめる構図
 になる。

その「我慢」が限界に達し
 たのは、食べ始めて20分ほど
 したころ。「高」の児童がド
 ーナツやジュースを取り始め
 ると、「あー！」と声が上が
 った。「気まずい」とおかわ
 りをやる児童もいれば、臆
 せず皿にお菓子を盛る児童
 も。「低」の児童の一部は立
 ち上がり、「ずるい、ずる
 い」と合唱。「中」の児童も
 つられて「いいな」と漏ら
 す中、食事の時間が終わりに
 なった。

生まれる国選べぬ 現実を学ぶ

ハンガーバンケットは、世
 界の食糧問題を体験するプロ
 グラムだ。清泉小の場合、現
 実の格差を模し、全体の2割
 弱が「食べ物に困らない」集
 団、3割弱が「一日1回食べ
 られるが、満腹にはならな
 い」集団、半数強が「栄養不
 足で亡くなる人もいる」集団
 に分かれる。実際に互いが目
 の前で食事をする中で、国
 の差による生々しい感情まで
 体感できる。

食後に教室に戻ると、他の
 グループの友達に「ごめん
 ね、ごめんね」と謝るほど
 罪悪感を抱いた「高」の児童
 の姿も。意見交換すると、
 「高」の児童からは、「見
 られて苦しくなった」「分け
 てあげたくなかった」、「低」

や「中」の児童からは、うら
 やましき以外に、「自分が
 『かわいそう』と思われて
 いるのかなと変な気持ちに
 なった」「食べ物がない国の
 人の気持ちがわかって申し訳
 なくなかった」と声が上がっ
 た。
 高・中・低を決める方法が
 抽選であることにも理由があ
 る。生まれる国は自分で選べ
 ないと気づくためだ。
 この日もそんな場面が。
 「低」だった児童の一人が
 「帰ったら、ラーメン作って
 もらおう」とつぶやくと、教
 師が「日本に生まれたみんな
 はこの体験が終われば食べら
 れるけど、世界にはあのパン
 と水だけで次の日まで働かな
 ければならない子どももいる
 よ」と投げかけた。

「貧しい国の人たちは、自
 分の努力が足りなくてそうな
 ったのか? そうではなく、
 カトリックの修道会を設立
 母体とする清泉小がハンガー
 バンケットを始めたのは、10
 年ほど前。「互いに愛し合
 いなさい」という聖書の言葉を
 実践する取り組みの一つだ。
 これ以外にも、昼のお弁当を
 おにぎりやパンなど主食のみ
 とし、おかずに充てるはずだ
 った分を寄付する取り組み
 も、毎週行う。
 ハンガーバンケットを体験
 したあとの児童たちが書いた
 プリントには、「節約する」
 「チャリティー(寄付)を多
 くする」「大人になったら現
 地に行って難民を助きたい」
 「医者になる」などの言葉が
 並んだ。

お互いに愛し合う 聖書の実践

教師でもあるシスター堂平
 房江さんはこれまで、卒業後
 しばらくしてから途上国を訪
 れたり、ボランティアしたい
 と母校に相談に来たりする元
 ・児童たちを見てきた。「今
 はまだ、自分が『足りてい
 る』立場だと知るだけかもし
 れないけれど、種をまくのが
 教育。いつの日にか、自分が
 身につけた力を人のために使
 うのか、自分のために使うの
 か、考えられる人になってく
 れたら」と願う。



どれにしようか
 高所得者のグルー
 プは、お菓子まで
 並んだテーブルから好きなだけ食事を取れる



おなかすいたね
 少しでも空腹を紛らわそ
 うと、もらった小さなパ
 ンを少しずつ食べる低所得者のクジを引いた児童



低所得者の「ずるいー」の声の中、
 苦笑いしながらお菓子をおかわりす
 る高所得者グループの児童=いずれも鎌倉市の清泉小学校

「かわりずるい
 おかわりずるい
 (木下こゆる)